

二重言語の詩学

—フォルマリズム期ヤコブソンの場合—

北岡 誠 司

はじめに。問題の所在。

周知のように、アリストテレス⁽¹⁾は、〈理想的な〉詩的語法を成り立たせるものとして、ひとつの《二律背反》を提唱している。

1. 〈理解〉：彼はまず詩的語法もまた〈意味の明確さ〉をもつ、分るものでなければならないという。しかし、〈意味の明確さ〉の方だけを〈狙う〉のであれば、日常用いられている〈通常語〉だけをごく普通に用いさえすればよい、措辞のうちに改めて《二律背反》を仕組む必要はないという。だが、その時、文体は〈平板〉に墮し、〈平俗性〉を超え出ることができない。分り易くはあっても、なにやら底知れぬ不可解なものもつ未知の魅力に欠け、なんとも異様・異形のものとして衝撃を与えることができない、というわけだ。これは勿論〈理想的な〉詩的語法とは認められない。

2. 〈衝撃〉：したがって、詩的語法は、〈理想的〉なものになるためには、〈慣用を超え出た性格〉〈平俗性を打ち消す効果〉を持つようではなければならない、という。日常の慣用的な表現とは違った、なにやら異様な措辞によって、ひとに衝撃を与えるようではなければならないというわけだ。しかしここでもアリストテレスは一方向のみへの偏向を排する。衝撃を与えることのみを狙い、異様で不可解な語法のみを一方向的に追い求めようとするならば、〈通常語〉を普通〈不可能な結合〉と見做されている様な仕方で結合するか、あるいは、日常あまり使われない、誰もが理解できるとは限らぬ語〈耳なれぬ語〉を用いるかすればよい。改めて《二律背反》を措辞の裡に仕掛けなくてもよい。しかし、その時、得られるのは、全くの〈謎〉か、〈不可解な異国語のちんぷんかんぷん〉ということになる。詩的語法である前に、語法として、つまり言語表現として成立しているのかどうかさえ疑わしいものに転落するというわけだ。さしずめ、クルチョーヌイフの言語(?) 実験などが恰好の実例として引合いに出されるであろう。勿論これもまた〈理想的な〉詩的語法とは認められな

い。

3. 〈理解〉と〈衝撃〉と：理解のみを求めれば平俗に墮する。衝撃のみを狙って、異様・不条理を追い求めれば、不可解に転落する。理解を狙ってしかも平俗に墮さず、衝撃を求めてしかも不可解に墮さぬ語法、いわば、理解が衝撃の基盤を用意し、衝撃が不意の理解を切り開くような語法、それが、アリストテレスによれば、〈理想的な〉詩的語法だということ。ところで、こうした〈理想的な〉詩的語法を実現するには、理解の基盤になる、〈通常語〉の普通の結合と、衝撃を約束しうる、〈通常語〉の異常な〈不可能な結合〉あるいは〈耳なれぬ語〉を、〈ある仕方で混用〉すればよいという。

〈混用〉と言いかくある仕方という。しかし問題はそのある仕方だ。どう〈混用〉すれば、理解と衝撃とを同時に保証する様な語法を実現しうるのか。その〈仕方〉こそが語法を詩的に、しかも〈理想的〉に詩的にするかどうかのかなめであろう。

ロシア・フォルマリストたちが、二十世紀初頭、ソシュール言語学と同様に、内在論の立場に立つことによって、新たに〈詩的言語の理論〉なるものを提唱した時も、根本の問題とされていたのは、この〈混用〉の〈仕方〉に他ならなかったと言える。その新しい用法と手順とを使って取組まれた問題はアリストテレス以来の伝統的な問題に他ならなかったというわけである。

I. 詩篇と〈日常言語〉〈詩的言語〉：提示

ロマン・ヤコブソンがこの問題を最初に取り上げて論じたのは、自ら〈言語の手段と機能との分析へのわが最初の《攻撃》と称する『最も新しいロシアの詩』²⁾(1919)である。その中で、彼は、《理解》と《衝撃》との二律背反の弁証法的統一の〈仕方〉いかんという、アリストテレスが後世に残した問題を次の様に捉え直す――

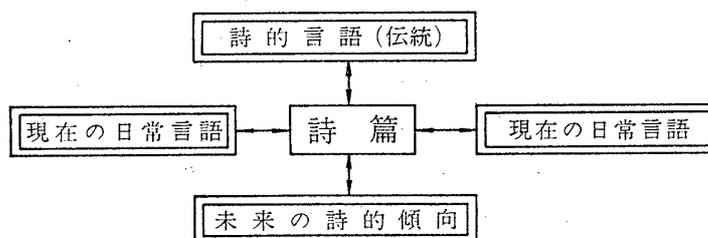
未知なるものは既知のものを土台としてのみ理解もされ衝撃を与えもする。〔I〕

では、言語現象・文学現象に即して言えば、この〈未知なるもの〉〈既知のもの〉とは何に当るのか。

同時代の詩的言語のどのような事実も、われわれがこれを〔詩として〕知覚しようとする時には、これを必ず三つの契機と対照させる。現に生きている詩的伝統〔詩的

言語], 現に用いられている日常言語, 現に顕れているものに対してまさに起ろうとしている詩的傾向, とに。(〔 〕内引用者) [II]

この関係を見易いものにしておくために, 次の様に図表化しておく——



ここに言う〈現に用いられている日常言語〉と〈現に生きている詩的言語〉とが, ソシュールの言う〈言語〉, 今日のヤコブソンが通信・情報理論の用語を借りて言う, 〈prefabricated possibilities〉の体系としての〈コード〉に当たるとしたら⁽³⁾, 先述の引用文 [I] に言う〈既知なるもの〉がこの二つの〈言語〉に当たると解してまず間違いあるまい。とすれば, 〈未知なるもの〉の方は, 〈詩的言語のあらゆる事実〉, つまり詩篇と, それを詩たらしめるためにそこに仕組まれているあらゆる詩的^{プリフォーム}奸策ということになる。

〈未知なるもの〉としての詩篇と詩的奸策が, 〈既知のもの〉としての二つのコード〈日常言語〉と〈詩的言語〉とに〈必ず対照される〉ことによって, はじめて, (単に言語テキストとしてだけではなく, 詩的テキストとしても), 〈理解もされ衝撃を与えもする〉——フォマリズム期ヤコブソンは, アリストテレスの言う, 〈通常語〉の普通の結合とその〈不可能な結合〉や〈耳なれぬ語〉との〈ある仕方での混用〉の, その〈ある仕方〉いかにということについて, まず《外側から》こう答えている。では《内側から》はどのような答えが与えられているか。

II. 〈日常言語〉〈詩的言語〉の構造と機能：提示

1. 両〈言語〉の構造上の相異

〈日常言語〉といい〈詩的言語〉と言う。これは明らかにわれわれが日常抱いている〈言語〉概念に齟齬する用語法だ。日常の会話であれ詩であれ, そこに用いられているのは紛れもなく同一の言語だというのが, われわれの牢固た

る日常の信念である。これに対し、ヤコブソンは、詩学という一種の《科学言語》の立場から、一方を〈日常〉と限定し、他方を〈詩的〉と規定することによって、ひとつの国語の裡に二つの〈言語〉を措定しようとする。日常の信念からすれば、なぜ、そしてどのような特徴を根拠に、〈言語〉をあえて二分し区別しようとするのか、と問わざるをえない。〈ある仕方での混用〉の〈仕方〉を明らかにするために、というのがそこに含意されている《なぜ》に対する答えであろうが、区別の根拠の方についてはヤコブソンはこう言っている――

正常な日常の言語的思考においては、〈意識は、受け取った感覚印象とその同化作用の結果とを、時間の上で互いに〔その成立時点を〕異にする別個の契機だという風には区別しない。つまり、私たちは、客観的に与えられる感覚印象とその知覚の結果との間に在る相異を意識しない〉（〔 〕内引用者）〔Ⅲ〕

これに対し〈詩的言語〉においては、

言語表象そのものが――音声表象も意味表象も――それ自体により多くの関心を自らに集中させ、音の側面と意味との繋りが一層緊密、一層内密なものになっている。そのために、習慣的な近接連合が背後に退くことによって、言語がより変化しやすいものとなっている。〔Ⅳ〕

と言う。これがまず両〈言語〉を区別するひとつの特徴である。両〈言語〉の要素（それが何であるかは後に検討）が相互に結びうる関係に基づいている限り、この特徴を構造（関係の網）上の特徴と呼んでおいてよいだろう。

2. 両〈言語〉の機能上の相違

言語の内部構造を決定する要因は、体系としての言語が、より大きな上位体系・文化とか社会とかの体系の中で、その一要素として果すよう求められている役割・機能だと言われる⁴⁾。では、上記の様な異なる構造上の特徴をもつ両〈言語〉は機能上はどう違うのか。

〈日常言語〉は〈通信の機能〉^{コミュニケーション}を〈固有の機能〉とするのに対し、〈詩的言語〉は〈感知の機能〉эстетическая функцияをその固有の機能とするという。そのために、〈日常言語〉による発話では、〈発話の指示対象〉に対する関心が前面に出て、発話そのものの構成のされ方、たとえば〈リズム〉などには

関心が払われないのに対し、〈詩的言語〉による発話・詩篇では、逆に、〈発話の指示対象に対しては関心が払われない〉で、たとえば〈リズム〉が主要な関心の対象となる、という。そのことは同時に〈詩的言語〉の発話における言語体系内の〈内在的な法則による支配〉（したがって、〈日常言語〉の発話における外在的な〈法則〉の影響の存在）という相異をも伴うという。

こうした機能上の違い、及びそれに伴う構造上の相異が在るが為に、単一の〈言語〉概念では、〈混用〉の〈仕方〉を内部に立ち入って明らかにするには不十分であり、あえて〈言語〉を〈日常言語〉と〈詩的言語〉とに区別し、それぞれを別個の〈言語〉として措定せざるをえないというわけである。

III. 〈日常言語〉の機能と構造：解釈

1. 構造上の特徴

〈日常の言語的思考〉では〈客観的に与えられる感覚印象〉とそれが〈同化作用〉を受けた〈結果〉とが成立時点を異にする〈別個の契機〉であるにもかかわらず、その様には区別されないと言われた（引用文〔II〕）。では、この〈感覚印象〉と〈同化作用の結果〉とは言語活動に即して言えば、つまり言語現象に翻訳して言えば、何に当るのか。あまりに心理学的な引用文〔III〕だけからではこの点について確かな答えを引き出すことはできない。

ヤコブソンは、同じ論文の別の所で、

日常言語〔の発話〕においては、固有名詞や姓はその指示対象と専ら近接連合によって癒着しているレットルである。〔V〕

と言う。あるいはまた次の様にも言う――

音声と意味との機械的な近接連合は、習慣的なものになればなるほど、ますます瞬時に成立してしまうものとなる。ここから日常言語の保守性が生じる。〔VI〕

どちらも、〈日常言語〉の発話における要素結合が〈習慣的な〉〈近接連合〉に基づいて行なわれている、という事実を共通して語っているにもかかわらず、〔V〕と〔VI〕とでは、その連合によって結合されるべき要素については、明らかに別個の言語要素をあげている。

ここでさらに、引用文〔IV〕では、〈音〉と〈意味〉なる用語と〈音声表象〉

と〈意味表象〉なる用語とが、とくに区別されずに用いられているということ、及び、詩において、

諧調法が扱うのは、音声 звуки ではなく、音素 фонемы である。つまり、意味表象と〔近接〕連合することのできる聴覚表象である（〔 〕内引用者）。〔VII〕

と言われる時の〈音声〉と〈音素〉、〈聴覚表象〉と〈意味表象〉という用語法を考え合わせるなら、〈日常言語〉の発話で何に何が〈近接連合〉するのか、どうも一義的に決定できないのではないかと思われるほど、〈近接連合〉すべき項目についてのヤコブソンの用語法は不統一である。もっとも、〔VII〕に言う〈近接連合〉し合う〈聴覚表象〉と〈意味表象〉は〔IV〕に言う〈音声表象〉と〈意味表象〉とに当ると取ってまず間違いはないだろうが。〈音声表象〉 фонетические と〈聴覚表象〉 акустические の相異は発話をその話し手・聴き手の相異に関係なく捉えるか聴き手の方からのみ捉えるかの違いに基づくにすぎないと考えられるから。しかし、他の、〈音〉と〈意味〉、〈個有名詞〉と〈指示対象〉という関係項と、〈音声表象〉と〈意味表象〉という関係項とを同一視していいのかどうか、ヤコブソンのテキストの範囲内では決定的なことは言えない。用語法上のこうした不統一を整理するには、どうしても、適当な《インデックス》を求めて、ヤコブソンの論述の外に出なければならぬ。

a. 〈指示対象〉—〈記号・意味〉—〈観念〉

フレーゲ⁹⁴は、〈記号〉つまり〈名称や語の結合されたものや文字〉と、その〈記号〉が〈指示するもの〉・〈記号の指示対象〉と、〈記号〉が〈指示対象〉を〈指示する仕方〉つまり〈意味〉と、その〈記号〉がわれわれの意識の裡で呼びおこす、全く主観的な、個々人によって異なるだけでなく、一個人においても違う時点では違うものとなる連想・〈観念〉とを、区別する。フレーゲによると、〈記号の指示対象〉とは、われわれが〈感覚器官によって〔直接〕感じ取ることのできる物体〉だという（〔 〕内引用者）。これは〈客観的〉実在だという。これの対極に在るのが〈完全に主観的な観念〉だという。〈記号の意味〉はその〈中間に位置していて〉、たしかに、一方で、それは〈すでに観念の様には主観的ではないにしても〉、他方、〈指示対象〉そのものの様には〈未だ物そのものというわけでもない〉という。

このうち、〈指示対象〉が〈物体〉そのものだという解釈は修正しておく必要がある。フレーゲ自身があげている例からも結論できる所なのだが、〈指示

対象〉とは、主体の意識、その《視線》と無関係に全く客観的に存在する、物そのものではないということである。それは、あくまで、意識が、〈記号〉と〈意味〉とを介して、それに向けられた時に意識によって捉えられた限りでの物体である。この点については、同じくフレーゲに拠って〈指示対象〉と〈意味〉との相異を区別しようとしているジンキン⁶⁾が、〈名称〔記号の一種〕と無関係に物が指示対象だと考えられるべきではない。あらゆる物は単に物であるにすぎない。名づけられていない物も存在しうる。しかし、あらゆる名称は常になにものかを名指している。そしてこのなにものかは一定の物である。このように、指示対象とは、物に名を与えることによって実現される、名称の属性である〉とまで言い切っている(傍点, [] 引用者)。つまり、〈指示対象〉は意識に関係なく存在する純粋な客体としての物体というより、すでにその物体の表象なのである。

b. 〈物質系〉〈記号系〉〈観念系〉

〈記号〉が、このように、〈指示対象〉を介して物の世界と繋り、〈意味〉を介して〈観念〉の世界と繋っているというこの二面性については、別の言葉で言えば、やや曖昧になるが、〈言語は現実と意識とに同時に所属する〉⁷⁾という様にも言うことができよう、もし、意識され名づけられる以前の純粋に客体としての物そのものが〈現実〉の、〈記号〉とその〈指示対象〉と〈意味〉とが〈言語〉の、〈観念〉が〈意識〉の、それぞれの構成要素と解しても差支えないならば。ソツェフはこの点をさらに一般システム論に基づいて整理してみせているが、それによると、ここに言う〈現実〉は〈物質系〉と呼び変えられ、それは〈一定の相互関係にある物質的な要素から成っている体系〉であると特徴づけられている。又ここに言う〈意識〉は、〈観念系〉と呼び変えられ、〈一定の相互関係によって結ばれている…観念…が構成要素となっている体系〉と特徴づけられている。これらの体系がいずれも均質な homogeneous 要素(物質か観念)から成る体系であるのに対し、〈言語〉に当たる〈記号系〉は不均質な heterogeneous な体系である。つまり、それは〈体系の構成要素が、それが物理的実体としてもつ属性の故にというよりはむしろ、それ自身以外の何ものかの指標となり、自分の外に在るもの〔観念〕についての信号となるという、〔物理的実体として本来有するのではない〕それらの要素に〔体系から〕付与された特性〔役割・機能〕の故に、体系にとって価値をもつ〔体系の要素たりえていよう〕様な、そうした体系〉と特徴づけることができるという(〔]内引用者)。

もしこれらの論者の言う様に、〈言語〉・〈記号系〉がこの様に二面性——〈物質性〉と〈観念性〉——とを同時にもつとすれば、〈記号系〉そのものの裡にも、その下位体系として《第二次物質系》、《第二次観念系》あるいは簡単に《概念系》とでも呼んでいい様な部門を措定し、〈記号系〉が〈物質系〉と〈観念系〉とを媒介した様に、〈記号系〉内でも、《第二次物質系》と《概念系》とを相互に関連づける《媒介系》とでも呼ぶべき部門を両下位体系の中間に措定した方が、〈記号系〉を一層明示的に表現できるであろう。

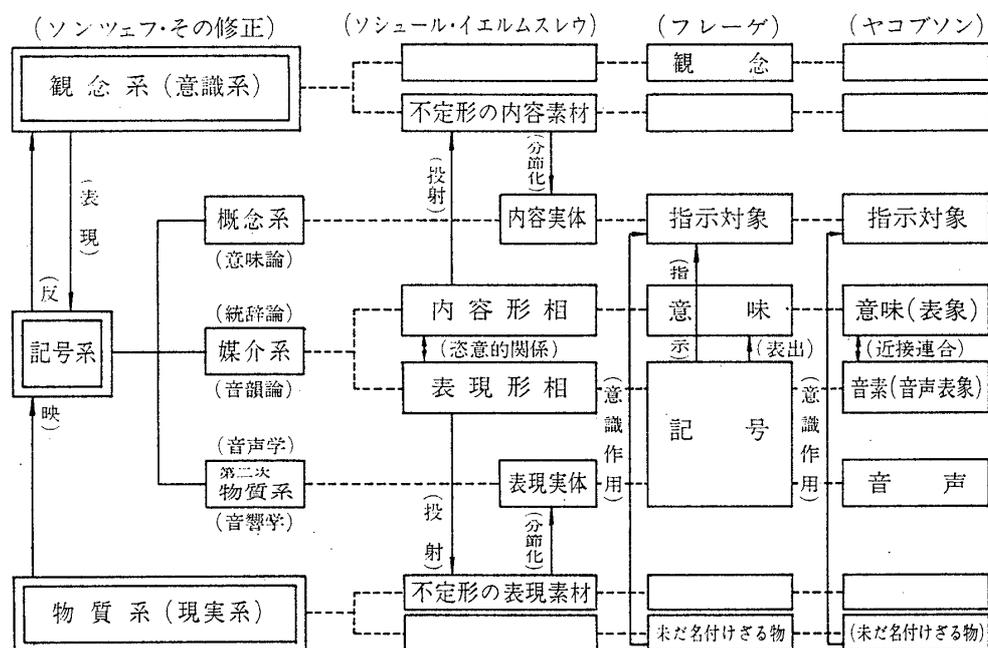
ソツェフの言う〈記号系〉にこの様な補足を加えておくことによって、われわれは、今まで触れてきたフレーゲらの言語に対する《外から》の特徴づけを、ソシュールやイエリムスレウらの《内側から》のいわゆる〈構造主義的〉な特徴づけに接合しうる接点を用意することもできる。

c. 〈不定形の素材〉・〈形相〉・〈実体〉

ソシュール⁽⁹⁾によっても、〈言語〉は〈観念と音とを仲介する〉一種の媒介装置だと言われる。彼は、まず、〈言語〉はいかなる〈実体〉をも産出する装置ではない、という。〈観念〉という〈実体〉も、〈音声〉という〈実体〉も、〈言語〉が自らの裡から産み出したものではない、という。それは、一方で、〈星雲〉の様に未分化で不定形の混沌である〈観念〉を、その表出手段（たとえば音声）に媒介するために、〈区分〉し〈限定〉し〈分節〉し、他方で、同じく未分化で不定形の連続体である、たとえば、〈音声〉を、〈観念〉に媒介するために、〈区分〉〈限定〉〈分節〉する。その意味で純粋に〈形式〉付与、構造化のための体系だという。屢引用される紙の表裏の比喩をここでも使えば、〈観念が表であり、音声は裏。裏を分断せずに同時に表を分断することはできない〉と言われる時の〈分断〉の仕方、〈分断〉の方式、それを供給するのが〈言語〉だということになろう。ソシュールは、周知のとおり、〈音声〉を分節化しこれに〈形式〉を付与する部門を総称して〈記号表現〉 signifiant, 〈観念〉を分節化し構造化する部門を総称して〈記号内容〉 signifié と呼んで、〈言語〉内に措定している。つまり、一方で、〈記号表現〉の〈形式〉・構造（関係の網）が〈無定形の〉素材、たとえば〈音声〉に一種の網として投射されることによって、〈音声〉が〈限定〉〈分化〉〈分節〉され、他方で、〈記号内容〉の〈形式〉・構造が同じく〈不定形の〉〈観念〉素材に關係の網として投射されることによって、これも同じく〈分節〉〈限定〉される。そのようにして〈言語〉は〈音声〉と〈観念〉とを媒介する、というのだ。

イエラムスレウ¹⁰⁴は、ソシュールが〈不定形の観念〉〈不定形の音声〉と呼んでいた二種の混沌たる〈星電〉状態を、改めて、〈内容素材〉〈表現素材〉と呼び、それらを限定・区分しこれらに分節化を与える〈形式〉の方は、〈内容形相〉〈表現形相〉と呼びかえ、両部門（内容部と表現部）の〈形相〉により分節化され整序された結果を、未分化の〈星雲〉状態の〈素材〉と明確に区別するために、〈内容実体〉〈表現実体〉と名付けている。

以上、a, b, cの所説を相互に関連づけて図表化し明示すれば、次の様になるだろう――



d. 心理現象の言語現象への読み替え

さて、この図表に示された、ヤコブソン用語法の一応の整理を基にして、引用文 [Ⅲ] に示された心理現象についての記述を言語現象へと読み替えるという本章の課題に戻って言えば、そこに言う〈客観的に与えられた感覚印象〉とは、これを聴き手の立場に立って解釈すれば、まず、記号系内の物質系・第二次物質系の要素、たとえば音声とか文字に当たると解釈できよう。それが〈知覚〉され〈同化作用〉を受けた〈結果〉とは、この〈感覚印象〉・音声なり文字なりの連続体が、表現形相によって整序され分節化された表現素材、つまり、表現実体に他ならないと〈知覚〉されて〈同一視〉され、その〈結果〉がさら

に、〈習慣的な近接連合〉によって、内容形相（意味）によって整序され分節化された内容素材、つまり内容実体（指示対象）と〈同化〉され、表現実体がそのまま内容実体に他ならないと〈知覚〉〈同化〉された〈結果〉ということになるであろう。話し手の立場に立って解釈すれば、〈感覚印象〉は、感覚器官に捉えられた、未だ名づけられざる物、つまり、記号系外の物質系の構成要素ということになろう。それが〈知覚〉され〈同化〉された〈結果〉とは、この〈感覚印象〉として捉えられたものそのものの連続体が、内容形相によって一定の区分・限定・分節化を加えられ整序された不連続体つまり内容実体（指示対象）だと〈知覚〉され、あるいはそれと〈同化〉され、その〈結果〉が、〈習慣的な近接連合〉によって、表現形相（音素体系）によって整序され分節化された表現素材つまり表現実体（音声あるいは文字など）と〈同化〉された〈結果〉だということになろう。つまりは、われわれが、〈日常言語〉的な意識の裡に在る限りは、たとえば音声（表現実体）を聴けば直ちにそれと連合した指示対象（内容実体）を想起してしまい、ものを指示対象と意識すれば直ちにそれと連合する音声なり文字なりを想起してしまうという、こうした実体（表現）と実体（内容）を短絡させ、その間に介在し、その短絡を実は内部で支え可能にしている媒介装置、表現形相（音素体系）と内容形相（意味体系）とは意識されることがない。つまり、ソシュールの言う意味での〈言語〉そのものがそれとして意識されることはない、ということになろう。

これが、『最も新しいロシアの詩』の段階でヤコブソンが言う、〈日常言語〉、あるいはその発話のうちに顕われる〈日常言語〉の構造上——要素の関係の仕方——の特徴だといえよう。

2. 機能上の特徴

こうした構造上の特徴は、機能が構造を決定するという認識に従えば、われわれが〈言語〉を〈日常言語〉として用いて、言語記号以外の体系、観念系（意識系）あるいはそれに媒介された物質系の、構成要素についての情報を伝えるという、〈通信の機能〉を〈言語〉に負わせたことの、いわば不可避の結果だと考えられるが、この段階のヤコブソンは、〈通信の機能〉が何であるかを立ち入って規定していないだけでなく、機能上の特徴と構造上の特徴との間に在る（と少なくとも今日は考えられている）因果関係を明示してもいない。両者の特徴は単に併記されるにとどまっている。機能による構造の決定という点について明確な認識が定式化されるには、次の段階、プラハ学派の理論活動を待

たねばならない。

IV. 〈詩的言語〉の機能と構造：解釈

1. 機能上の特徴

この段階のヤコブソンによれば、〈日常言語〉にとっては、〈通信の機能〉、つまり、言語体系外の体系——観念系（意識系）、あるいはそれに媒介された物質系（現実系）——の諸要素についての情報を伝えるのが〈固有の機能〉であると言われた。これに対し、〈詩的言語〉の〈固有の機能〉はエスティッシュな機能、つまり、〈感知の機能〉だといわれる。〈伝達の機能〉はここでは〈極度に抑えられる〉という。〈詩的言語〉による発話では、何かを〈伝達〉する働きは背後に退き（あるいは周辺部に去り）、何かを〈感知〉させる機能が前面に、あるいは中心に現われる、というわけだ。では、主として何を〈感知〉させるのか。〈音声〉だというのが当時有力な学派であった Ohrenphilologie⁴⁴の答えであるが、すでに背後にクルテネ・ンチェルバの音韻論の伝統をもつヤコブソンははっきり〈音声ではない〉と断じている。これは明らかにわれわれの日常的な言語意識に反する判断だ。朗唱される場合は勿論、自ら黙読している場合ですら、われわれが詩のリズムとして〈感知〉しているのは、テキストを再現してゆく〈声〉のリズムだというのが、われわれの直観の語るところではないだろうか。しかし、ヤコブソンは、詩篇のリズムを調節する〈諧調法〉は〈音声〉を扱うのではないと断じ去っている。つまり、言語記号系内の第二次物質系の要素そのもの、あるいはむしろその物理生理的特徴が〈詩的言語〉による発話が〈感知〉させるべき真の対象ではない、というわけである。では、記号系内の意識系・概念系の要素（指示対象）と成ることによって、われわれの感覚的意識の前に現われる、物質系の要素つまり物、これを生きいきと〈感知〉させるのが、〈詩的言語〉の〈感知の機能〉なのか。しかし、ヤコブソンは言う——〈詩は発話の指示対象には関心を払わない〉。とすれば、残されているのは、表現部門でも内容部門でも形相だけということになる。つまり、表現形相・〈音素〉と内容形相・〈意味〉あるいは〈意味表象〉ということに。ヤコブソン自身、〈諧調法が扱うのは、音声ではなく、音素である。つまり、意味表象と連合することのできる聴覚表象だ〉と述べ、〈音声表象と意味表象とがそれ自体に……関心を集中させる〉と言う。〈指示対象〉あるいはそれを介して物そのものの世界が〈詩的言語〉の〈感知〉の対象となるのではなく、〈指示の仕方〉、同じ〈指示対象〉をもどう〈指示〉するか——たとえば、マヤコフ

スキーが《暮れてゆく街路をガス燈が照らしている》という〈指示対象〉をそのような表現で〈指示〉せず、〈禿げの街燈が／淫猥に脱がせてゆく／路上から／黒のストッキングを〉と指示する時、〈感知〉さるべきは、《暮れてゆく街路をガス燈が照らしている》というイメージではなく、このエロティックな効果を狙った表現の仕方・〈指示の仕方〉・〈意味〉そのもの、それこそが真の〈感知〉の対象だ、というわけである。したがって、表現部門に関しても、あくまで、そうした〈指示の仕方〉〈意味〉と連合しうるものとしての表現要素、つまりは、〈音声〉の物理・生理的特徴（あるいはここに朗読者個人にのみ特有の、彼自身の個性とだけ連合する様な社会的・心理的特徴——フレーゲのいう〈観念〉も含めて——を入れてもよいだろう）ではなく、あくまで〈音素〉《集合》の実現態としての〈音声〉《元》、表現形相の実現された形としての表現実体、それが真の〈感知〉の対象である、ということになる。したがって、この立場は、単に、ヤクビンスキーの定式の修正やドイツ流の Ohrenphilologie——ジューフェース⁴⁴ら——への批判を暗示しているだけではなく（次の『チェコの詩について』[1923]ではその批判はすでに明示的になされている）、同時に、そのことを通して、たとえばポモルスカによって〈In the theory of the early Opojaz a sign in poetic language is characterized as *purely phonic*》⁴⁵（イタリアック原文）と批判されている特徴も、すでにこの段階で、音韻論と意味論の方向にむかって、のりこえられようとしていた、と言えなくもない。

2. 構造上の特徴

〈日常言語〉が、その固有の〈通信伝達の機能〉を有効に果すためには、〈言語〉内部の表現形相（意素体系）と内容形相（意味体系）の方はこれを意識の外あるいは周辺に追いやり、両実体、音声と指示対象とを、〈近接連合〉によって短絡させ、音声を指示対象と、指示対象を音声と、感受させるという、そうした構造上の特徴が不可欠であった。では、上記の様な〈感知の機能〉を有効に果すには、言語要素間にどのような関係が成立していればよいのか。

この点に関するヤコブソンの答えは、適切な用語を見い出せぬためか、きわめて曖昧である。〈詩的言語〉の発話・〈詩篇〉においては、〈日常言語〉のテキストの場合より、〈音の面と意味との繋りがより一層緊密で、一層内密なものになっている〉と言う（傍点引用者）。

すでに見た様に、〈日常言語〉では、〈音の側面と意味〉、つまり、音声と指

示対象の裡に実体化されて現われる音素体系と意味体系という形相の体系相互間に、習慣化した〈近接連合〉が成立していることが〈通信機能〉を果す上で不可欠であった。では、上記のヤコブソンの言葉の含意している所は、〈詩的言語〉においては、その〈近接連合〉が〈日常言語〉以上に〈一層緊密で、一層内密なものになっている〉ということなのか。明らかにそうではない。ヤコブソンも、〈音の側面と意味〉との〈習慣的な近接連合が背後に退く〉のが〈詩的言語〉だと明言している。あるいは又、〈近接連合〉が〈日常言語の保守性〉を保証しているのに反し、〈詩的言語〉では〈一層緊密で、一層内密〉な〈音の側面と意味との繋り〉が、逆に、言語を〈より変化しやすい〉ものにして、反保守的なものにして、と断言している。したがって、この〈一層緊密で一層内密な〉という比較級に対して、〈日常言語〉の裡に暗黙の裡に前提されている原級、暗黙の比較の対象、それは、明らかに、〈近接連合〉の〈緊密さ〉〈内密さ〉ではない。としたら、それはどのような種類の関係か。

夭折した〈ポーランドの天才的な言語学者〉⁴⁴⁾ クルシェフスキーが、すでに十九世紀末、言語の歴史は〈類似連合に基づく進歩の力と近接連合に基づく保守の力との永遠の敵対関係〉⁴⁵⁾ から成り立つ、と見事に喝破している。

ヤコブソンが、あの比較級の原級として、暗黙の裡に〈日常言語〉の発話のうち存在しているものと前提していたものは、〈進歩の力〉〈言語をより変化しやすいものにする〉要因、〈類似連合〉に他ならない、ということである。

このクルシェフスキーの洞察をも組み込んで、ヤコブソンの〈詩的言語〉の構造的特徴についての所説を読み替えば、次の様に言えるだろう――

〔イ〕 〈日常言語〉の発話では、音素と意味、音声と指示対象との間の〈習慣的な〉、したがって〈保守の力〉として働く、〈近接連合〉が〈より一層緊密で、一層内密〉であるのに対し、〈詩的言語〉の発話・詩篇では、逆に、その〈近接連合〉は〈背後に退き〉、より〈緊密〉でも、より〈内密〉でもないものになっている。

〔ロ〕 それと共に、〈日常言語〉の発話では〈背後に退き〉、より〈緊密〉でもより〈内密〉でもない、音素（音声）と意味（指示対象）との間の、反〈習慣的な〉、したがって、〈進歩の力〉として働く、〈類似連合〉が、詩篇では、逆に、前面に現われて、〈より一層緊密に、一層内密になっている〉。

語結合の原理の階層の裡で、日常言語の場合は、近接性原理が、〈抽象的な文構造図式〉⁴⁶⁾ に語彙項目を挿入する際に決定因となる原理として、類似性原理に対し決定的に優位に立ち、後者を周辺部に追いやるのに対し、詩的言語の場

合は、逆に、類似性原理こそが、詩句形成の決定因として、近接性原理に対し決定的に優位に立ち、後者を周辺部に追い落す、というわけである。

音素と意味、音声と指示対象との間の関係の仕方の、こうした構造的特徴こそが、詩的言語の発話において、〈通信の機能〉を〈極度に抑え〉ることを可能にすると共に、詩的言語に固有の〈感知の機能〉を前面に押出すことを可能にしてもいる。

無論、この段階のヤコブソンによってこの様に明言されているわけではないが、その含意している所を充分に開いて補足して言えば、以上が、『最も新しいロシアの詩』(1919)の段階でのヤコブソンの、〈混用の仕方〉(アリストテレス)についてのひとつの答えである。

V. 残された課題

では、〈通信の機能〉を背後に押しやり、〈感知の機能〉を前面に押し立てることを可能にする、近接性原理に対する類似性原理の決定的優位という関係は、具体的には、言語要素をどのように結合することによって実現されるのか。つまり、〈通常語〉の〈不可能な結合〉の具体的な方式としてはどのような方式があるのか。ここで、われわれは、ようやく、〈詩的奸策〉を具体的に検討しうる地点にまで到達したことになるが、それは次の機会にゆずらざるをえない。さらに又、詩的奸策と日常言語とのダイナミックな相互変形という通時論的問題についても、ここでは、残された課題のひとつとせざるをえない。しかし最大の残された課題は、これまでの検討をソシュールの言う〈ラング〉と〈パロール〉との区別に基づいて根本から読み直すということであろう。変形文法理論の導入による読み替えは未だ時期尚早としても。

注(1) 「詩学」二，二章（藤沢令夫訳、『世界古典文学全集』16. 43～45頁頁所収）。以下、特に注記しないが、アリストテレスの引用文はすべてこれに拠る。

(2) Новейшая русская поэзия. Прага. 1921 (1919年執筆)。以下特に注記しない限り、ヤコブソンの引用文はこの論文からのものである。

(3) "Linguistics and Communication Theory." in Structure of Language and its Mathematical Aspects. Rhode Island, 1961.

(4) Общее языкознание (внутренняя структура языка), глава первая: О понятиях языковой системы и структуры. М., 1972.

(5) 以下、フレーゲからの引用は全て Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege, Translated by Peter Geach and Max Black. Oxford, 1970 所収の "On Sense and Reference" に拠る。

- (6) Н. И. Жинкин. Четыре коммуникативные системы и четыре языка, в сборнике статей «Теоретические проблемы прикладной лингвистики», М., 1965.
- (7) А. А. Брудный. Семантика языка и психология человека. Фрунзе, 1972.
- (8) В. М. Солнцев. Язык как системно-структурное образование. М., 1971.
- (9) F. de Saussure. Cours de linguistique générale. Paris, 1969.
- (10) L. Hjelmslev. Prolegomena to a Theory of Language, translated by F. J. Whitfield. London, 1961.
- (11) Ohrenphilologie についてはヤコブソンの О чешском стихе. М., 1923 参照。
- (12) Л. П. Якубинский. О звуках стихотворного языка. В сборнике статей «Поэтика». Петроград, 1919.
- (13) K. Pomorska. Russian Formalist Theory and its Poetic Ambiance. The Hague, 1968.
- (14) 第四回スラヴィスト国際会議でのヤコブソンの発言。IV 国際ный съезд славистов. Материалы и дискуссии. М., 1962.
- (15) М. Н. Крушевский. Очерки науки о языке. Казань, 1883.
- (16) Н. Ю. Шведова. Грамматика современного русского литературного языка. М., 1970.